

3 と畜場搬入豚から分離された *Streptococcus suis*

○^{アノモト}松本 ^{ケイ} 圭 (豊橋市食肉衛生検査所)

細井 美博 (")

石山 登 (")

【はじめに】豚の疣贅性心内膜炎の主要な起因菌である *Streptococcus suis* は、ヒトにも感染し、髄膜炎、敗血症、多発性関節炎などを引き起こすことが知られている。昨年、厚生労働省からと畜業者等に対する豚レンサ球菌感染症についての注意喚起があったが、今回、当検査所のと畜検査で豚の疣贅性心内膜炎から分離された *S.suis* について調査したので概要を報告する。

【材料及び方法】平成14年9月から平成17年6月に搬入された豚で、疣贅性心内膜炎を認められた282頭の心内膜疣贅物(疣贅物)を定法によりにスタンプ培養後、起因菌を分離・同定した。さらに *S.suis* I 又は *S.suis* II が3頭以上から検出された6農場の計54株については、Kirby-Bauer 法により、13薬剤についての感受性試験を行なった。

【成績及び考察】と畜豚453,105頭中282頭(0.06%)に疣贅物が認められ、そこから分離した235頭240菌株中、*S.suis* は67.5% (*S.suis* I :36.25%、*S.suis* II :31.25%) を占めた。10菌株以上分離された農場が3ヶ所あり、*S.suis* による疣贅性心内膜炎は特定農場に続発する傾向がみられた。薬剤感受性試験では、実施した6農場のうち、1農場の菌株は13薬剤すべてに対し感受性を示した。4農場はすべての菌株がリンコマイシン及びテトラサイクリンに対し耐性を示し、1農場は1菌株を除きリンコマイシン及びテトラサイクリンに対し耐性を示した。3農場の菌株間での薬剤感受性の違いについては、聞き取り調査の結果、本試験で用いた13薬剤を含有しない飼料を購入し、給餌していたことから、農場で治療等に用いた薬剤による耐性獲得の可能性があり、薬剤の使用には慎重を期する必要があると考えられた。*S.suis* は人獣共通感染症として重要であり、今後は本調査の結果を、と畜業者等を含む養豚に関係する従事者に対する指導・啓発に生かしたい。